

# 魔法使いの呪縛

自由にして良いよ

戻ってくるなら

— 執着 —

著者：宵待



魔法使いの呪縛

自由にして良いよ

戻ってくるなら

—執着—



※前作のメリーバッドエンドの続きです。

※登場人物は全員20歳以上です。

※本作には、執着・理性崩壊・過激寄りの性的描写(言葉責め等)が含まれます。

※コメディ要素と下ネタ表現を含みます。



# 人物紹介

小鳥遊ユイ(たかなし ゆい)

160cm。20歳の大学3年生。国宝級美人。明るくてハキハキ物を言う性格。コミュ強。

光葉レオ(みつは れお)

190cm。22歳。社会人。かなりのイケメン。お調子者の魔法使い。



「.....お前さ、それ以上進めるなら、俺はマジで、お前のこと孕ませに行くからな？」

さっきまでの冗談みたいな声ではない、ゾクゾクするような艶のある声。

「自分で下着脱いで。スカートは履いたままね。」

と言われたので、戸惑ってしまう。

「...この前はやってたじゃん？何？今はできない？」

と冷めた目で言われるので、それに従う。

まず、震える手で上を脱いで、ブラジャーも外す。

何となく気恥ずかしくて震えてしまい、レオさんの視線をより強く感じてしまう。

ちらりと見ると、真面目な顔でコチラをジッと見てくるので、ドキッ！としてしまう。

上は全部脱いで、何となく腕で胸を隠しながらも、パンツも脱いでいく。

「で、俺に見えるように、スカート持ち上げて。」

とベットに座ったまま言われる。

それに従い、私はスカートを持ち上げた。

レオさんはそれをずっと見ているので、私は恥ずかしさからレオさんの方を見れなくなる。

「...は！...お前なんでもう濡れてんだよ？」

と言うと近づいてきて、耳元で、この変態女♡と言われたので、ゾクゾク！としてしまう。

「乳首とか、ビンビンになってるじゃん？」

なんでこうなってんだよ？なあ？」

と甘ったるい声で言われる。

「胸は自分で弄ってろ。」

と言われたので、それに従う。

なんでか分からないけど、命令されるのゾ  
クッ！とする♡

普段は胸なんて自分で触っても気持ち良くな  
んてないのに、レオさんに見られているのか  
と思うと、快感から身体が震えてしまい、自分  
の指なのに気持ち良くなってしまう。

それを見ながら、レオさんは私の前に座り込  
んで、私が手を離れたスカートをめくって中に  
手を入れてくる。

至近距離で見つめられてる！？ミニスカートを履いてたから、しゃがまれると簡単にそこ

が見えてしまい、恥ずかしさのあまり自分の目を手で覆う。

自分でも濡れてるのが分かる。そこをこの欲しくて仕方がなかった男に見られてるのかと思うと、それだけでイってしまいそうだ。

「お前、毛が薄いから殆ど全部丸見え♡  
ここメッチャ勃起してるじゃん？触って欲しい♡？」

「え？ひっ♡！？」

急に割れ目に触れてきて、優しく擦り付けてくる。

嘘でしょ！あのレオさんが♡

そう思うと、ちょっと割れ目を擦られたただけだったのに、ビクビク！とアッサリと絶頂していた。

「え？何？お前もうイったの？」

と言いながらもずっとスリスリと一番反応のいいクリを集中的に弄り始める。

イったってわかってるのに、なんでやめてくれないのよ！

「やらああ♡♡いまらめえええ————♡♡」

ギャグで逃げ回っていた、余裕そうだった魔法使いの理性が、粉々に碎けた瞬間だった。



# 1章.なんで私のこと好きなのに振り向いてくれないのよ！

小鳥遊目線

遡ること数日前。

三葉レオさんとは中学3年生の14歳の時に  
出会い、その間、顔を合わせたのは数回。

大学になってから再会して、今日までの2年間は、ほぼ毎日顔を見ている状態。そして、その2年間何もなし。

告白しても上手くかわされている。

「好きです！ 付き合ってください！」

「よっし！ 突き合ってやるよ！」

人差し指を差し出されてお前も同じようにしろ  
と言うので従う。

「E・Tい～！」

と言って人差し指同士を合わせてきた。

この人若いのに、ネタが古いっ！？

でも、名作だから私も知ってる！

「俺、魔法使い系の話は見まくってるから！  
今はどんな古い過去作も、スマホがあればどこでも見れるもんな！」

らしい。

そうしてまたしても私の告白はスルーされていく——

大学3年生になった今、私は友人とお酒を飲みかわしながら、彼の愚痴を零していた。

「本当にあの人は、毎回助けてくれるクセに、全然振り向いてくれないのよ～！」

「あー、たまにそういう訳分かんない人いるよねー。

アンタの顔は国の宝なのに。性格も明るくて面白いし。

しかも、変な人なんでしょ？ 器物破壊とか、建物損傷とか？」

彼は最初の頃はそうだったけど、魔法使いとして覚醒した後に、ジョブという職業選択みたいなので、独自のフィールドに相手を連れ込める機能があり、そこで戦闘できるようになってからは、器物破壊罪はなくなったらしい。

ファンタジーゲームあるある設定なので、オタクの私は直ぐに理解した。

それ以前でも、魔法使いの仲間によって損傷された建物は、直ちに修復されていたとか？

彼自身も戦う際はかなり気を使っていて、出来るだけ人気(ひとけ)のない場所を選んでいたみたいだ。

私はそれから、酒を浴びるように飲んで、彼を忘れようとした。

「とゆうわけねえ、いまかりゃレオしゃんにこくはくしましゅ♡」

「呂律回ってないから！アンタ飲みすぎなのよ！」

というのを聞きながら、私はスマホで レオさんに迎えに来てと連絡した。

「れおしゃ〜ん♡」

「うわ！酒臭！お前まだ大学3年生だろ？酒も程々にしとけよな！」

と言われたので、告白大作戦である♡

「レオちゃん！しゅき♡つきあって♡」

「酒での告白は受け付けてお任せ～ん！」

シラフの時でも受け付けてくれないクセに何を言うか！と思ってしまう。

.....

...

もうこうなったら！と小鳥遊はある決断をした。

また取り憑いてきたよどみを祓ってもらった後に、私の部屋に呼んで、レオさんが見ている前でスカートに手を入れて、下着を下ろした。

完全シラフ、酒にも酔ってないし、よどみもさっき祓ってもらったばかり。

この人なんか視線感じるなと思ったら毎回目が合ってパツと逸らされるし、告白したら、たまに悩んでいるみたいな表情を浮かべるし、男の子と話していると必ず邪魔してくるし、

お前、男と話すな！とか言ってくるし、俺の事もっと見ろよ！とか、絶対に私のこと好きなのになんで振り向いてくれないのよ！

というわけで最終手段、脱ぎたての下着を渡す！を実行に移した。

彼は呆然としている。コイツ今度は何すんだよ！みたいな態度。

「...これあげます♡自由に使って下さって良いですよ♡」

「え？ちょっ！？ええ！？」

今の時代にそれやりますか！アンタ犯罪ギリギリよ！

いや、お前可笑しくない？！と言って返してこようとするので、あげます！と言う。

「え？俺、よども祓ったよな？  
ナニコレ？逆セクハラ？」

とまたしても茶化した感じに言われる。

何度となくいらないから返す！と言われるが、少し名残惜しそうにされるので、あげます♡と言った。

そして、レオさんは、なんなんだよお前。と言いながらも、はあー、とため息を吐いて、最後は見えなくするようにポケットにしまった。

...やってしまった...、...いや、やってやったわ！

もう後戻り出来ない！ここまで覚悟見せたんだから、振り向いてよね！

〇〇〇

2年前、私が彼に惚れた後、よどみを祓ってもらった後に、彼は語り始めた。

「魔法使いはさ、魔法使いからしか生まれないんだよね！

だから、俺はチョー子供が欲しい！」

魔法使いは少ないし、仲間からも口が悪くて煙たがられていて、外れ者扱いされているらしいレオさんは、孤独に生きてきたと語ってきた。

「ま！嫌われ者の俺にはそんな相手がいないんだけどな！」

と笑って流していた。

だから、私はその時、貴方の子供をすぐに身ごもってもいいと思うぐらいに好きだと思った。

それから、2年間、私は頑張りまくった。

そう全ては計算の上。

この男を逃さないためである！

そして、そんな小鳥遊の近くに忍び寄る黒い影があった……。

〇〇〇

その日、またスルーされた私は、休日なのをいいことに一人酒を飲み、二日酔いで頭痛が酷かった。

それに漬け込まれたみたいによどみが侵入してきた。

よどみは恋愛感情を一番好むらしい。

『最近のお前は美味しい！』

『もっとよこせ！』

と脳内に直接語りかけてくるノイズ音が走る。

よどみの声だと直ぐに分かった。

そして、私は暴走モードに突入させられてしまった。

もう既に暴走モードだったのに、さらなる高み  
へ——

## 2章.「全部よどみのせいなんです！」「俺 祓ったのに！？」

「れ、レオさん！ 私変なんです！レオさんを見てると、レオさんのズボンを下ろしたくて仕方ないんです！」

ぶーっ！とレオさんは飲んでいたお茶を吹き出した。

「おま、何言ってるの！？てか、メツチャヤバイよどみに取り憑かれてんじゃない！」

お前の感情を食い荒らしまくって肥えたか！」

「い、イヤなら、逃げて下さい！わたし、止められない！」

今の時代、合意なしズボン下ろしは立派な犯罪である！

冗談じゃ済まされません！

「...いや、まあ、お前なら別に良いけどね。

てか、お前そんな欲望を持ってたのかよ。」

レオさんが言うには、よどみは元々持っている欲望を増幅させるだけであって、願望を増し増しにするだけなのだとか？

「この変態女♡きゃあ♡痴漢よお♡」

とノリで言うてくる。

そして、レオさんのズボンに手をかけてしま  
う。

（きゃあきゃあ！ やりすぎよ！

確かに妄想でちょっとだけこういうのを思っ  
たりしないこともなかったけど、付き合う前は  
駄目だと自制してたのに！）

何度となく告白しても、笑い話でスルー。お前  
なら良いけどね。と、下着を下ろす許可すらし  
てくれるのに、なんで付き合うのは駄目なの  
よ！

(...いや、違うわ！この人はここまでしないと  
いけない人なのよ！

この人を手に入れるには、.....合意あり孕ま  
セックスしかないわ！)

勿論、私は最初からOK！告白してたのもそ  
ういうことでもいいという意味でもしていた  
し。

大学生で付き合うならセックスがついてくるの  
は自然な流れである。

子供が欲しいと言っていた彼。

知り合いの多い親が、幼稚園から私を撮影し  
て写真を投稿。中学からインフルエンサーの

私には、子供なんて余裕で養えるぐらいの資産が手元にある。

「このよどもはな、子どもがほしいって言うな。

お前、俺の子供産んでくれるの？」

とニヤニヤして笑う。

私は強くうんうん！と頷いた。

レオさんにもこの話はしていて、お前、俺との子供ができて大丈夫とか、俺とは付き合っていないクセに何言ってるの？と大笑いしてスルーされた。

引かれなくて良かった！とその時私は思った。

そして、レオさんは真顔になった。カッコいい♡

「...でも、駄目だわ。お前の意思で子供がほしいって思ってくれないと俺ヤダ！

お前今操られてるだろ？

俺が祓ったら、お前、気持ち変わるかもしれないしな。」

あそこまで言ったのにまだ私の気持ちを否定してくるの！もう、止まらない！

大体、よどみは私が抱いてる気持ちを強めるだけなんだから、これは私の願望なのよ！

ただ、我慢してただけなんだからね！

「...はい、祓った！

というわけでお前離れて、ね...え？」

よどみなんてもう関係ないわ！

我慢してたのを私はよどみのせいしにて実行に移した。

「え？確かに祓ったのに？

...もういないよな？え？どういうこと？

お前の完全意思100%で、俺を求めているってこと？」

「求めまくってます！子供作っても大丈夫なように完全に準備できてます！

じゃないと親に、異性を紹介とかしませんよ！」

親にもレオさんが好きと2年間熱く語っていて、精神的に不安定で心配されていたのに快調になり、もうそんなに好きなら結婚しなさいよ！とされている。

もう3年生なので、1、2年生の時に頑張った私は、授業は大体終わっている。

億単位の貯金、親からは娘に取り憑く変な物を引き離してくれる彼を離すなと言われていて、職ももう既にある。

学生で子供ができて問題なし！

外堀は固め終わっている！

だからこそその強行突破である！

「私は貴方との子供がほしいってずっと思っていました！

大丈夫です！これは、よどみのせい！

よどみのせいなんです！子供ができてもよどみのせいにすればいいですからね！

私一人でも育ててみせますから！」

「いや、もうよどみは祓ったんだけど！

お前よどみを言い訳に使ってる？」

と言うのを無視して、ベルトを外すが震えてて中々上手く出来ない！

そもそも他人のベルトなんて外した事ないし！

夜の蝶だったお母様に、男性のベルトの外し方を聞いておけば良かった！と後悔した。

「それとな、お前一人に育てさせるは、俺にはない選択。

作るなら俺にも子育てさせろ。」

その答えに胸がキュンキュンとなった。

惚れ直しまくり♡。

「...お前さ、それ以上進めるなら、俺はマジで、お前のこと孕ませに行くからな？」

と、さっきまでの冗談みたいな声ではなく、ゾクゾクするような艶のある声で言われる。

それに頷くようにして、ベルトを外しにかかった。

そうこれはよどみによって感情が増幅されてるからだわ！

私の意思ではないの！だから、レオさんに引かれるなんてこともないわ！

引かれたとしても、これは、よどみによってですから！と言い訳ができる！

と自分に都合のいいように考えてしまう。

「...ふーん、...オツケー分かった。」

と余裕ぶって見ているだけだった彼は、私の  
手を取ると、何処かに連れて行く。

その夜、彼の理性は完全に壊れた。

続きはこちらから。